

機関番号：32803

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21820063

研究課題名（和文）付随的語彙学習を通じた既知語知識の再構築

研究課題名（英文）Reconstructing Vocabulary Knowledge Through Incidental Learning

研究代表者

星野由子 (HOSHINO YUKO)

東京富士大学・経営学部・講師

研究者番号：80548735

研究成果の概要（和文）：

本研究全体の目的は、リーディングを通して付随的に既知語の意味が学習されるのかを調べることである。この目的を達成するために平成 21 年度はまず学習者にとって少なくとも 1 つの意味が既知である語について、他の意味がどの程度習得されているのかを調べた。このため、まず日本人英語学習者用の語彙リストである JACET 8000 のレベル 1 に掲載されている語で、且つ 2 つ以上の異なる意味を持っている単語 7 語を選択した。この際、「多義ネットワーク辞典」を参考として選択した。実験の結果、参加者の中でも語彙サイズが比較的大きい学習者（3000 語前後）であっても小さい学習者（2000 語前後）であっても、その他の意味の定着割合が中心義の定着割合よりも有意に低かった。また、語彙サイズ、中心義についての知識、その他の意味についての知識の相関係数を調べた結果すべての値が有意であったが、語彙サイズとその他の意味についての知識の偏相関係数は有意にはならなかった。したがって、単語について複数の意味の知識を持つことと語彙サイズの関係は小さいと考えられる。しかし、扱っている語が既知語であるため、学習者がどの程度目標語を知っているのかについての個人差が大きいため、付随的語彙学習の研究を行うよりもまず、既知語の語彙知識の構造を詳細に調査することが必要であると判断した。

上記の実験結果を基に、中心義ではあるが日本語の訳語が 2 つ以上あり、かつ中心義以外の意味についての訳語も 3 つ以上ある単語計 4 語について、単語の中のどのような意味がより学習者に理解されているのかを調査するための実験を行った。この結果、訳語として使われた日本語の関連度よりも、意味が中心義か、それとも中心義以外の意味かという要因の方が学習者の語彙知識に大きな影響を及ぼしていることが判明した。

更にこの研究結果に基づいて、中心義とその他の意味に焦点を絞り、日本人英語学習者が中心義を知っており且つその他の意味を知らない場合について、その目標語をどのように解釈するのかを調査した。具体的には、意味同士の関連性が強い多義語、意味同士の関連性が弱い多義語、そして意味同士の関連性が無い同音異義語の解釈を比較するためのデータを収集した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of the whole research is to investigate whether some aspects of already-known words are incidentally learnt through reading. In order to achieve this goal, I conducted a preliminary research in 2009. That is, using known words to learners (i.e., learners know at least one meaning of each word), I checked to what degree Japanese university students have knowledge about those words. I selected words belonging to level 1 in JACET8000, and I also check these words have more than one meanings. The results of this preliminary research suggested that regardless of students' vocabulary sizes (learners knowing more than 3000 words or learners knowing about only 2000 words), they know core meanings better than non-core meanings. Furthermore, correlation coefficients between the estimated vocabulary size, the knowledge about core meaning, and the knowledge about non-core meaning suggested that all of them had significant correlations, but the partial correlation coefficients between the estimated vocabulary size and the knowledge about non-core meaning was not significant. These results do not indicate strong relationship between having more vocabulary size and knowing more than one meaning of word knowledge.

However, the shortcoming of this study is that the degree of knowing the target words differed greatly between the participants. Hence, the results of this research suggest the necessity of conducting research about the mechanism of known words before investigating the effect of incidental learning in detail.

Based on the results above, I conducted another study. I selected four words that have two or more Japanese translation words both in core meanings and non-core meanings. I also checked the relatedness of these Japanese translation words, and compared which affected the learners' knowledge more, the types of meaning (core or non-core) or the relatedness. The results showed that core-ness affected the learners' vocabulary knowledge, but the relatedness did not. Hence, core meanings are more easily acquired than non-core meanings, which is along the line with what the cognitive linguists have been claiming.

Next, I conducted another study based on the above results. Focus was on the core and non-core meaning, and I examined how Japanese EFL learners interpreted the target words, when they knew the core meaning but did not know the non-core meaning. I have already collected the data, but it is still under analysis.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	740,000	222,000	962,000
2010年度	650,000	195,000	845,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,390,000	417,000	1,807,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

キーワード：第二言語習得理論、語彙習得、多義語

1. 研究開始当初の背景

語彙知識の獲得は外国語学習の中核をなしており、その重要性は新学習指導要領にも如実に現れている。このような現状の中で、語彙習得についての研究は20年ほど前から非常に盛んになっている。しかし、現在までの語彙習得研究は新出語の習得について焦点が当てられてきており、既知語の意味知識がどのように発達していくのかについては明らかになっていない。つまり、単語を習得した後に様々なインプットを受けることでどのように学習者のもつ知識が変化していくのかが未解明であるため、現在までの研究は一時的な語彙習得過程を調べることにとどまっている。

例えば、現在までの研究では英語の「juice」と日本語の「ジュース」を結びつけて覚えることを習得と捉えているものが多いが、これでは語彙習得の本質を解明するには不十分である。なぜなら日本語と英語で意味・概念が完全に同一の単語は少なく、意味・概念が部分的に重複している単語や、片方の言語のみその概念を持つ単語が大多数を占めるた

めである。心的辞書内において1つの単語は語形、意味、概念という3つの表象から成り立っているが、日本語と英語で意味・概念が同一でない単語ではその意味・概念を再構築する必要があり、これは意味の再構築や概念の再構築と呼ばれている。学習の初期段階ではまず英単語と日本語訳を1対1で対応させる Equivalence Hypothesis を用いて「juice」と「ジュース」を対応させ、その後新たに「juice」が「肉汁」という意味も持つことを知った場合に意味の再構築が起こる。また、「juice」と「ジュース」の概念は完全に一致しないため、概念の段階で更に再構築が起こる。本研究ではこの3レベルの中でも、二段階目の「意味の再構築」に焦点を当てる。

2. 研究の目的

現在までの付随的語彙学習の研究では新出語がどの程度学習されるかを調べるものがほとんどである。しかし、付随的語彙学習を通して既知語の知識がどのように発達していくかを調べた研究は存在しない。意味の再構築にはインプットされる英語の量が

重要であるという提言もなされているため、付随的語彙学習で大量の英文を読むことが意味の再構築に正の効果を与える可能性が予測される。また、既知語知識の発達プロセス自体もほぼ未踏の分野であるが、本研究で意味知識の再構築がどのように行われるのかを明らかにできれば、この研究成果に基づいて概念の再構築の研究へと発展させることが可能となる。したがって、本研究は読解活動を通じた付随的語彙学習によって、学習者が既に知っている単語（既知語）の知識がどのように再構築されていくのかを、特に意味知識に焦点を当てて検証することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究全体の目的は、リーディングを通して付随的に既知語の意味が学習されるのかを調べることである。この目的を達成するために平成 21 年度はまず学習者にとって少なくとも 1 つの意味が既知である語について、他の意味がどの程度習得されているのかを調べた。参加者が少なくとも中核的な意味を知っている単語を選出するために、日本人英語学習者用の語彙リストである JACET 8000 のレベル 1 について「多義ネットワーク辞典」で中核的な意味の他に 1 つ以上の意義を持つ単語を選んだ。中核以外の意義は、メタファー、メトニミー、シネクドキのいずれかに属するものである。中核以外の意義については「多義ネットワーク辞典」に掲載されており、且つその単語を含む文脈が平易な英語で書かれているもの、そして当該の文脈内において中核的な意義とは異なる意義の訳語を持つ単語を選出した。

これらの単語をまず単独で提示し、どのような訳語が頭に浮かびやすいのかを大学英語教員 4 名に調査し、全員が一致した訳語を産出した単語を採用した。更に、目標文脈内（中核的な意義・中核的な意義とは異なる意義）で提示した際に、2 つの文脈で別々の訳語が産出されるのかを大学英語教員・英語教育専攻の大学院生計 5 名に対して調査し、全員が別々の訳語を産出した文脈を使用することとした。これらの目標語を含む文脈について、46 名の大学生が日本語に訳す課題を行った。この際、目標語の訳語も書くこととし、その答案を 2 名で採点した。このほか、語彙サイズテストを行って受験者の語彙レベルを調べた（研究 1）。

研究 1 の結果を基に、中心義ではあるが日本語の訳語が 2 つ以上あり、かつ中心義以外の意味についての訳語も 3 つ以上ある単語計 4 語 (leave, break, take, get) について、単語の中のどのような意味がより学習者に理解

されているのかを調査するための実験を行った。これらの単語については、12 名の日本人大学生に対して目標語内での訳語同士の関連度を事前に調べておき、意味の種類（中核的か、非中核的か）と訳語同士の関連度のどちらが学習者の持つ語彙知識に影響を与えているのかを調べた。推定語彙サイズが 1033~3567 語である日本人大学生 33 名に対し、1 つの目標語につき 8 文を提示し、目標語が正しく使われている文を選ばせた。さらに、文を選んだ場合にはその文を訳すよう指示した（研究 2）

更に研究 2 の結果に基づいて、中心義とその他の意味に焦点を絞り、日本人英語学習者が中心義を知っており且つその他の意味を知らない場合について、その目標語をどのように解釈するのかを調査した。具体的には、意味同士の関連性が強い多義語、意味同士の関連性が弱い多義語、そして意味同士の関連性が無い同音異義語の解釈を比較するためのデータを収集した。この結果については現在分析中である。

4. 研究成果

研究 1 の結果、参加者の中でも語彙サイズが比較的大きい学習者（3000 語前後）であっても小さい学習者（2000 語前後）であっても、その他の意味の定着割合が中心義の定着割合よりも有意に低かった。また、語彙サイズ、中心義についての知識、その他の意味についての知識の相関係数を調べた結果すべての値が有意であったが、語彙サイズとその他の意味についての知識の偏相関係数は有意にはならなかった。したがって、単語について複数の意味の知識を持つことと語彙サイズの関係は小さいと考えられる。しかし、扱っている語が既知語であるため、学習者がどの程度目標語を知っているのかについての個人差が大きいため、付随的語彙学習の研究を行うよりもまず、既知語の語彙知識の構造を詳細に調査することが必要であると判断した。

研究 1 の結果に基づいて行われた研究 2 の結果、学習者の語彙サイズに関わらず、訳語として使われた日本語の関連度よりも、意味が中心義か、それとも中心義以外の意味かという要因の方が学習者の語彙知識に大きな影響を及ぼしていることが判明した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

Hoshino, Y. (2010). The categorical facilitation

effects on L2 vocabulary learning in a classroom setting. *RELC Journal*, 41, 301-312.

Tagashira, K., Kida, S., & Hoshino, Y. (2010). Hot or gelid? The influence of L1 translation familiarity on the interference effects in foreign language vocabulary learning. *System: An international journal of educational technology and applied linguistics*, 38, 412-421.

Hoshino, Y. (2010). The relationship between vocabulary knowledge and reading ability in vocabulary tests employing contextual sentences. *IRICE PLAZA*, 20, 45-54.

Hoshino, Y. (2010). Semantic restructuring of vocabulary knowledge: Mapping an L2 word with different L1 translations. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 21, 31-40.

Ushiro, Y., Hoshino, Y., Shimizu, H., Kai, A., Nakagawa, C., Watanabe, F., & Takaki, S. (2010). Disambiguation of homonyms by EFL readers: The effects of primary meaning and context interpretation. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 21, 161-170.

[学会発表] (計4件)

星野由子. (2010). 「L2 多義語習得の困難度の検証: 意味の核と訳語同士の関連性の観点から」. 第3回 JACET 英語語彙研究会&英語辞書研究会合同研究大会, 早稲田大学, 2010年12月11日.

Hoshino, Y. (September, 2010). *Examining the difficulties in acquiring various meanings of L2 vocabulary: Core meaning or relatedness of L1 translation?* Paper presented at the 20th European Second Language Association in University of Modena and Reggio Emilia, Italy.

星野由子. (2010). 「既知語知識の発達過程: 読解中における意味の再構築の検証」. 第36回全国英語教育学会大阪研究大会, 大阪: 関西大学千里山キャンパス, 2010年8月7日.

卯城祐司, 甲斐あかり, 清水遥, 星野由子, 名畑目真吾, 長谷川祐介, 矢野賢, & 中川知佳子. (2010). 「フラッシュバックが日本人 EFL 学習者の物語文理解に与える影響」. 第36回全国英語教育学会大阪研究大会, 大阪: 関西大学千里山キャンパス, 2010年8月7日.

[図書] (計2件)

卯城祐司 (編著). 『英語リーディングの科学』. 東京: 研究社. (第7章、第10章担当、第6章分担執筆)

相澤一美、望月正道 (編著). 『英語語彙指導の実践アイデア集—活動例からテスト作成まで [CD-ROM 付]』. 東京: 大修館. (第II章活動例 8, 20, 21 分担執筆)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

星野 由子 (HOSHINO YUKO)
東京富士大学・経営学部・講師
研究者番号: 80548735

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: